

WRI News Letter 94

MO

1979.11.25 戦争抵抗者インター日本部・大阪市あべの区旭町2-12-2 WRI大阪

今号特集「反原発の月行動を考へる」

★ハガキで今号への批判・感想を送って下さい(風)

なかまたちへ



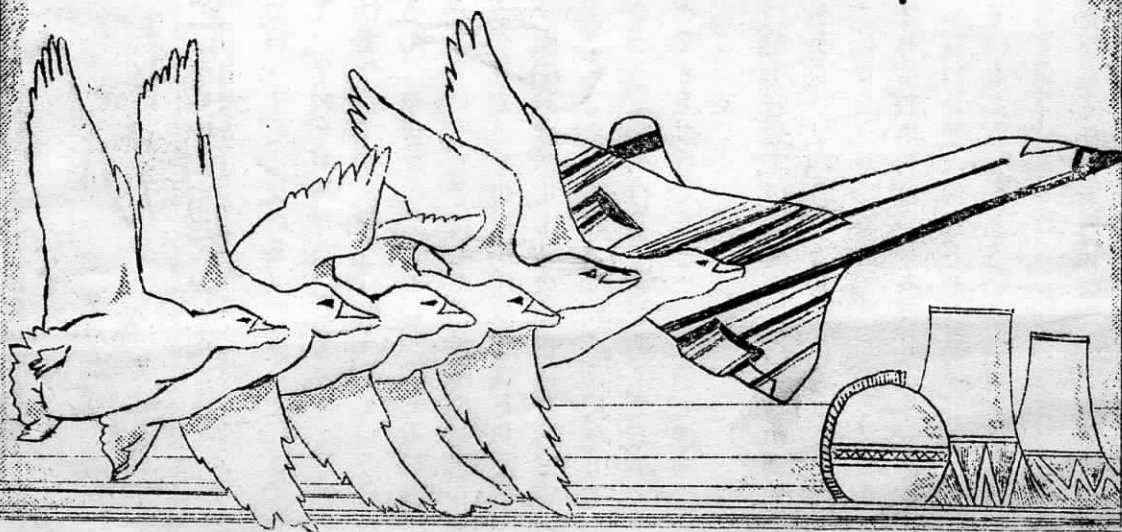
- かつて鳥たちが、さえずり歌った―青い空。
- かつて山の樹々が、さざめき囁き交した―透明な風。
- かつてさまざまな魚が、むらがり遊んだ―光る海。
- かつてものたちが、走りたわむれた―緑の草原。
- そしていま私たち周、もはや取りかえしもつかぬ、それらかけがえのないものを見失って、ただ、「かんまん死」への道を、歩みだしている。
- WRIのなかまたちへ。

「原子力」が、私たちにつきつけているものは、あれがこれかという選択の問題なのではない。

いまこそ、反原発・反核をなにがなんでも叩く以外に、人間として生きていく道はない、という現代の状況だ。

「未来のため」だけではなく、いまのいま、現在のために、確信をもって、共に叩こう。

原子力はどのくらい安全なものであるのか——



☆へ自由連合とは何か？と少し長くてもよいのかと思いますが、どうか喜んでみて下さい。そしてできればあなただけの考えをハッキリ。

自由連合とはなにか

ふこう
& ころう

反原案 10・26デモに関連して――

ウリ加、みんなと反原案をいっしょにやるようになって三回目。

三回目の1026は実行委に名を列ねていたものの、こちらは準備が終った会場にいて、「うわあー、こんなにたくさん反原案をやってる人たちがいるんか」とまあ、お客サンの気分でカンゲキしていたものだ。

去年・今年。もうお客ではいられない。

そこで、ちょっとはちがう趣考をこらさねばと、だんだん世話役になっていく。

ところが、実は、この準備がたいへん。

今年の10月行動実行委員会は、八月のはじめの実行委準備会を皮切りに、当日まで5回の実行委・1026と秋祭の小委員会が5回。作業日3回。共同情報というこでのじうまきや、推進派行事に付する反撃行動など、それこそ連日に近いうごきと話し合いを重ねたことになる。

ではみんなと一しょにやるとはどんなことか。1026のデモだけに焦点をこぼって、たそえみたい。

☆

☆

☆

一口にデモといっても、その考え方は、実行委参加団体によって、それぞれちがう。たとえば、市民グループ・労働者グループ・学生グループというふうに。へもちろん、市民グループといってもみなおなじでない。ここでのいうときはむしろ原案連合グループともいうべきで、そのなかには学生もいるし、労働者もいる。原案連合はグループの連合だから学生や労働者グループもここでは市民グループに含まれてしまう。だから、この分け方はきわめて大まかで図式的だ。そのことを前提としたへんつきで使用する。

さて、10月行動実行委では、その参加団体の考えのちがいを認めあう、ということではたてまえ的に一致している。しかし、その認めあうということの内容の中に、それぞれのちがいをあまり深く知らずお互いに立入らないまま、自分をも含めて、実はケイバツしあっているようなところがある気がする。

たとえばこうである。

― 労組のデモなんて日当勤員やないか。何のデモ

が知らん人も来てたで。(市民・学生)

— 学生のジグザグなんて、自己満足的にエネルギーを発散させてるだけやないか。あれでは一体何のデモをやつてんのかわからへん。(労組・市民)

— 市民のあんなチンタラデモ、まるで遊びや。あれで本気で叩く気があるんかいな。(学生・労組)

だから、共同行動といつてもふつうはなかなかこの三つがいっしょにうまく連合しあつてやつていく例は全くといつてよいほどない

それをこんどの10月行動の場合でいうと、従来から実質的に活動をしてきている原産連系の市民グループ(人数は少くとも)が、成行や上、実質的な運営の働き手となる。その熱心さから、実行委の出席もしぜん多数を占める。それは避けられない現状だ。

そういつたことから、デモのやり方、すすめ方にしても学生や労組グループは、「まあ市民グループの線まで下りて、いっしょにやる」という妥協的、野合的かんじで同調したと云えなくはない。

今回の実行委では、その点をもう一歩深めて、「ではデモとは何か、共同行動として、どういう運動をつくっていくか、そのためにデモはどう創られねばならないか」等という論議はほとんどなされなかった。そんな論議をすれば、せつかくいっしょにやれるものもやれなくなる、という若干の危惧と、それ以上に

時間的制約によってへなれあい似的に省略することが、暗黙裡に合意されたのである。

(しかし、又この種の論議は五回十回ぐらゐのこととて、話しあえばわかる、というもんではない。

— たとえば、実行委の三回目になつてから、学生グループからヘスローガンが提起されてひとめめした。スローガンの機軸となる学生の主張は「反原発斗争は何よりも政府・権力にむけられねばならず、さもないければ原発を止めることはできない」というものだ。もちろん、そのスローガン—

「原発・再処理工場即時無条件全面停止」
「美浜・高浜原発を始め、停止中の加圧水型原発運転再開阻止」
「80年原子力予算概算要求撤回」
「核燃料サイクル自立化粉碎」
「原船「むつ」廃船」
「日本の独自核武装阻止」—は、市民グループにとつてもなんら異議があるわけではない。

だが、ことさら異議はないということをもつてはつきりいうと、市民グループの感覚では、ことばかりが先鋭化し、内実が死語化している。自分自身のことばとしては発しにくい。具体的にピンとこない。といつて、それに代る新しいスローガンのイメージがあるかといえ、それはないということだろう。あるいはそれ故に、スローガンそのものにあまり意味を認めることが出来ず、学生の提起には消極

的な反対の立場にたったってしまっというところであ
ろう。

このような立場のちがいは、デモの前に行われる約
40分ほどの集会の参加のしかたにもよくあらわれてい
た。

(三首三首)

つまり、きわめて型どおりのその集会に対して、そ
の運営者、司会とか宣言を読むものとか、などの一部
をのぞいて、右はしに陣どる市民グループは、もっぱ
ら、それぞれおしゃべりに夢中になったり、ちようち
ん配りの準備でてんてこまいだったたり、集会の進行に
関心をもたぬ者がほとんどだった。

中央部に位置した大人数労働組員の対応は、いわゆる
メーデーなどにみられるようなもので、前列部分は一
応固き、後ろの部分は我関せずのデモ待ち。

それらともっとも対照的なのは学生グループで、整
然と地面にすわりこみ、しかるべきところで拍手、と
いう秩序だったまどまりをみせていたことである。一
あとで、司会をした^{（おしゃべり）}皆さんは、私かしゃべってるのを
ちゃんと聞いてくれたのは学生だけだった。こんどき
ほど学生をみなおしたことはないと話した。

さて、デモのやり方については、夜だからということ
で、アッサリ、ちようちんデモが決まった。

実行委は、手づくりのちようちんつくりの共同作業

日を設定し、それぞれくふうをこらして当日来る人
の分も作ることにした。へ当日はみこしちようち
んや、カンオケちようちんも登場した。も、とも労
組は、軍縮協が購入配布することになり、また、一
なせちようちんか、納得できない学生たちは、はっ
きりしないままだった。

☆ ☆ ☆

で、当日当夜。

二千数百という大デモの先頭は、棺桶型あんど
んを中心に、紙コップちようちん数百をかがけて、
時にはさしあげ、時には左右にゆらゆらと、光のデ
モンストレーションを展開してすすむ市民派およそ
二百人？そのあと、ちようちんかちうほらのなかを
えんえんつづく「軍縮協」加盟の労働組合二十人弱
の動員。へ動員というといふバカにしがちだが、そ
れも当事者には大へんなことだということとは理解し
ておかねば。それにデモは人数が多い方が景気が
つくというものだ。そして、そのあとまっくるな影
の学生グループ二百人？人。

デモは扇町公園から南電本社前まで。

なんといってもいちはんにぎやかで、いちばん明
るくて目立つ市民グループの列は、ギターにあわせ
て歌をうたったり、いまじやすっかり定着したシュ
プレヒコールを思いきり叫んだり、ハンドマイクを

まわして、誰でも思いついたことをしゃべったり、手にしたちょうちんをいっせいにぐるぐる廻したり、差上げたりして行進した。

さて、そこでいよいよ南電本社前。ーとなるとやっぱりちよっと立止まって、一声いいたくなるのが人情というもの。

夜だから、もちろん門はしめられシャッターもおろされている。うすぐらい路上にいろのは私服とガードマンが20人ばかり。ところがビルの二階以上の窓はコウコウと電気がついてゐるのだ。いかな市民派といえど、黙ってす通りなどできようか！

「電気が足らんなんていうの、どこのどいつや、おまえのここの電気こそ、いますぐ消せ！消せ！」

「消せ！消せ！」

すると、なんとまあ半分電気が消えましたよ。

勢いついた市民グループは、ここぞとばかりこぶしをふるいあげ、マイクをまわして順番に日頃のおもいのだけをぶつける。うたをうたう。シユプレヒコールがくりかえされる。いやはや、もう、ナンボ警官がどなっても、おどかしても、うごくともせず、またやりだす。

かれこれ二十分近く、隊列をみだし路面にひろがってそうやってたろうかー

と、やや、機動隊がくらかりの南電ビルの中から出

てくるではないか。

「やっぱり、おまえらグルやったな」

いっそうデモ隊の騒ぎ声はさらに大きくなる。うしろにつづく労組の隊列は前へすすめなり。で、その一部は、この混乱のま最中、デモの残業はごめんだ？とばかり、南電の前で解散したり追いついて通りすぎだした。

デモ屈出責任者のAさんは、これ以上の混乱をさけるため市民グループが歩きだすよう必死でマイクで叫んでいる。こどもはおびえたように、目をまんまるくさせている。

ようやく動き出した市民派の隊列が百メートルほど先の橋を右折して渡りながらふとみると、最後尾はー。前の隊列と百メートル以上引き離されてしまった学生がジグザグをやりながら南電の前でひとときわはげしい規制でボカスカやられている。機動隊のライトに照らされて、やられてる学生が浮きぼりになってわかる。

こりやたいへんだ。このままみんながいきすきてしまえば、学生は孤立させられてやられほうだいだ。

「おい、ちよっとひきかえそう、学生を守れ」と叫ぶんだが、どんどんいつてしまった労組などに面こえるものではない。あべこべに労組から、「おまえらが動かんから混乱がおきるんや！」とどなら

れる。

私ら十数人が学生らのところに引きかえし、そしていっしょに橋まで。

流れ解散地点にきてもまだコウフンはさめず、市民グループと学生は「早く解散しなさい」という警告マイクを聞きながし、わいわいさわいできて、ようやく帰路についたのは、時近くだった。

と、ま、結果としては、それぐらいのところまで、逮捕者も大きな「ガ」人もでず、この日のデモは終わったのだが、「久しぶりにデモをやった」という気分や「という声があったとおり、たしかにやるもの、高揚や発散みたいなものもあって、デモは「そう連帯感が生れる。そして、「ちよっとオモシロカタ」というのが、やや無責任かもしれないが私のこの夜の感想だ。

☆

☆

☆

ところで、ちよっとオモシロかったこの関電前のコウヨウは、その後すこし問題として批判がおこった。それを要約すると「デモの前に、実行安として、最低、関電前でどういうふうにするのか、キツキリとした申し合せが今後は必要だ。あの場合、市民グループは隊列をくずして入り乱れ、「アナキー」な混乱状況だった。指揮者の声はほとんど届かず、警官の介入によって不測の事態がおこりかねなかった。指揮者の指示はきいて行動するということが最低のこととして

守られねばならない。」……

これを問題として、市民グループの現実にあてはめるとき、市民グループのほとんどは、その個々のグループは、いわゆる統一組織とは全く異質の、個人の自由な連合で成り立っているということがまず出てくる。だからナンバーもあいまいで、その時出てきたものがメンバーというような不確定さがある。もちろんリーダーや代表者はいない。ただ熱心なものが何となく世話人に自ら進んでなって、ビラや電話や機関紙で行動や集会を提起する。提起は指令ではなく、あくまで提起にすぎない。

よくもわるくも任意、かつ本意的にそれが行われているということであり、提起の伝達方法のむずかしさ、不十分さも加わって、徹底した一致や合意が、(時には不確定でもあるナンバー)全部にゆきわたるなんてことは、はじめからできない相談といつてよいだろう。(これは当然、統一と団結を何より組織の強さとする労働組合や学生たちの視点からすれば、どうしようもない市民運動の立ちふくれであり、弱点とされるものである。さきにあげたデモに対する、労組・学生・市民それぞれの他者への批判は、ある意味で、このことの表現形態をめぐってできていく深いところに根をおろした立場といえるだろう。)

☆

☆

☆

(相互不信)

市民運動あるいはグループ成立の契機は、たとえばへん私に連々を例にすれば、反原発を訴う方法としての電気料金問題、ということになる。ナンバーをナンバートラしめてあるものは、それぞれに認識の深淺、知識の大小はあれ、「事実行然においての共同、あるいは連合」の意識である。

だからナンバー個人にとっては、自分以外から提起されたことであっても、自己の自発的（へそれゆえ積極的な）主体的判断と責任において、その一回一回の参加・不参加をきめるということになる。もちろん実際には、そうカッコよくはいかなくて、何となしの女性だったり、呼びかけられてづいていただけという現実がいっぱいある。ただそんな問題がいっぱいあったとしても、行動への参加が決して上からの命令や動員、つまり強制（へそれを証明するものは、いつでも自分の判断でやめられること）ではなくて、たとえふとした気まぐれであっても、少くとも自分の決定による自由参加だということである。

つまり、このような最低の自発性をいつも保証していることが市民運動の特徴なのであり、^{そして}そのことが弱さであると共に強さに外ならない。

そして、反原発の運動がいま「自分の生きざまをかえ世界をかえるものだ」というとき、支配者の論理ともいうべき「統一と団結」の思想、それを体現したタ

テの人間関係を貫徹する体制社会に対して、全く新しい質の問いは、この「弱さ」を「強さ」としてどう突き出すことを意味している。

「さくばらん」に云えば、誰からの指令も指揮がなくともみんながいっしょに自分の自由な意志でやるやれる「自由連合」ということに外ならない。

☆ ☆ ☆

「弱さ」を「強さ」としていうことを、もっと現実の場で、たとえば1026のデモにあてはめるならば、そのデモの場が、女・子ども・こどもづれの有機動隊とぶつかるのはイヤだ、怖いという人、家や会社にかくれてきている人、知人にあまりしられたくない人、ちょっと気まぐれでのぞきに来た人。足の悪い人、身体の弱い人、老人、デモははじめてだという人、それから労働組・学生—そういった人なすべての人たちのおもひの表現の場として、保証されねばならないということがまずある。

とすれば、デモを提起し、準備し世話をする人は、当然、そういうあらゆる立場と条件の表現が可能となるような「どんなやり方があるか」を充分検討し、協議し、とりまとめて、「いいねいな合意と、その周知徹底のための方法をつくす」ことが役割ということになる。へたとえば、アメリカシアトルの原発建設地占拠のデモにあたって、一旦あまり前から

シエル同盟を中心とした話し合いが行われた。そして参加者の約20人単位のグループづくりと、グループのなかにファシリテーターとよぶ連絡役の設置。ファシリテーターの十数回にわたる非暴力トレーニングの受講。そこではさまざまな状況を想定した技術と思考の訓練が行われて、各グループに伝達されたほか、さらに全参加者に、60頁あまりのハンドブックが渡されるという、きわめて方法的な合意の技術システムが充分につくられた。ひとつの例として、このシートグループ占拠斗争にあらわれたやり方は、分権的連合主義のアメリカ的方法を示している。そして意図的にも市民グループの弱さを多様で創造力をもった新しい強さにしてしようとするひとつの方向だとも云える。

☆

☆

☆

ところで現実としての10月行動実行委は、へ原園連々市民グループを中心とはしていても、シートグループのようなものとして機能する状況にはなく、日本の現実として、つまりは「できる」ようにしてやる「こと以外にない」わけである。

「市民グループ」「学生」「労働者」などに

そして「できる」ようにしてやる「こと」において、少くとも1026のデモは、関電まへの高揚時に際してあらわれた現象は、今までのデモのあり方を多少とも変える方向を、はからずも問題として提出することになったといつてよい。

つまり、この無意識的にあらわれた状況をどう受けとめて、どのような判断とするかーもつと直截に云えば、あんな「アナーキー」な統制をとれないようなことではやっぱり困るというように、あいまいな修正主義として「統一」へもどるか、「連合」の視点をより明確にもつことでのデモをどうへ、さらに一歩すすめたデモを創る方向へと歩み出るか、そのまさに分岐点として問題は提出されている。

ーへいままでの、共同行動を称するデモの多くは、市民へも呼びかけながら、具体的には、その内容において足手まといとして切り捨てられ、はじめから参加しえないものであった。市民グループの多様性は、デモの統制になじまないものとして、いつも配慮の外にあった。つまり、いぜんとして「統一」が「カ」&とされることによって、デモは必ず指揮されずくなくとも、最低の定められた一線ともいうべき規律からはみだすものはゆるされないとということであらめられた。そして、また権力も、デモの許可にあたって、デモの秩序というものを誰よりもよく要求することを忘れなかった。

だが、この規律とか秩序の内実を追求すると、例えば、今年の原水禁世界大会における「統一」の主張や方法と、全く軌を一にした発想に外ならない。そして、1026デモにおいて、あの場合「最少限」指

揮者の指示に従わねば」という希望の見解や意見もまたその延長線から出てくるものである。云うならばどのような最低限の規律であっても、「従わねばならぬ」となるとき、それは参加者の自由な発意、個人としての高揚、ましてやハイピング的行為の一切を規制する働きをするからである。」

☆

☆

☆

「できるようにしてやる」という10.26デモにおける参加者の自由連合として、致達すべき「理念」を、いまとりあげている面において、ここで対比的に示して問題をはっきりさせておきたい。

① デモは参加者が自分のおもいの示威としての「発露」、発散のへよるこび、その相関的へ高揚としてある。またそのことにおいて個人ひとりひとりが自分に対して責任をとるへ行動の網状的展開である。

② へ行動の網状的展開とは、単独行動とは異質のデモの中での隣人との連鎖の關係によって生れる無作熱の現象、あるいは状況である。

そして、連鎖關係は意識的へそれゆえ主体的な自覚であればあるほど強められる。(或は弱められたり切斷される。)

③ だからデモへの参加とは、デモがつくり出す状況のなかで、自分がデモの部分として、「その部分になる

こと」である。みずから部分となることで、自分の役割を見出し、えらび、その行為をへ非暴力直接行動として創りだすことである。――
だが問題は、「できるようにしてやる」というとき、まずこのような理念を具体的に意識した参加者がいたかどうか――

実際は、ほとんども無自覚のままにふるまいながら、多くの人たちが半ばこのようにふるまい、半ば自分のおもいとちがう行動^{行為}に対して異和感を持つことによつて、へ連鎖關係をゆるめ、あるいは切つた――
というのが、その時の状況だつた――ということを、いまどのように判断するか、が先ずある。

もっとざっくりばらんに云えば、このような理念が自覺的に全員に把持されていなければ、デモの自由連合は完結されないのか。――とすれば、ほとんど自由連合は実現しがついたのではないか。10.26のデモは、では何であつたのか――の問題である。

☆

☆

☆

このようにかくと、10.26のデモは、もうへ到達すべき理念から、はるかに離れたものと、すでに決めつけられ、評価が決定しているような感じがある。そこで念のため、果してどうなのかを、逆に自由連合のへ理念に即して論証してみたい。
まずへ理念の①と②について。

④ 10.26デモが「市民グループ」の半数以上にとって「参加者の自分のおもいの示威としての発露、発散のよるこび、その相関的高揚」として、意識の如何にかかわらず、その志向と追及によって行われたことは、誰もが肯定できるだろう。

（ここでの特徴は、デモが何よりも主体的な参加者個人の問題として前面におかれていることであり、既成のデモのように「団体、或はグループ」がデモの主体でないということである。）

また、「できるようにしてやる」というやり方が、すくなくとも「統一デモ」の志向をもたないことにおいて、「それゆえに「網状的展開」としてあらわれた」とすることに、充分反対はないだろう。

とすれば、①の問題は、「デモ」中の行動について、どれだけ各人が責任を自覚していたかという点に限定される。

ところが、ほとんどの参加者が、10.26デモのなかで自覚的に「自分に対して責任をとる行動」をとったかという点、もうしらべるまでもなくそうではない、というほかはない。強いて求めるならば、それはデモのあの反省として、と云える位のものである。

だが、「自分に対しての責任」というとき、それがデモの前から自覚的にとらえられていたか、デモのあと出てきたかにかかわらず、人はそのデモの中の行為

について、もし問われるならば、責任をとらざるをえないものとしてある——ということができる。

つまり、もうそのときは、自分に対してだけでなく「自己」に対して責任を免れえない——ということである。

と、するならば、人は自覚の有無にかかわらず、10.26デモにおいてもその行動の大小、相関的重大性の軽重において、へ自分に対する責任を背負って行動してしたのである。

それゆえ自覚の有無は、自由連合の存否をはかるものというよりは、むしろ、自由連合デモにとつての深化の技術として重要な意味をもつというべきだろう。

このように見るとき、自由連合の「理念」①にあるものは、それが「統一的デモ」を志向したものでないことにおいて、「できる」ようにしてやった。10.26デモにもきわめて自然にあらわれている状況であり、この場合、意識化することでの「自由連合状況」の追認にほかならない。

つまり、その状況を自由連合として、それゆえ意識的に認識するが、しないかの問題はなのである。

こうして10.26デモが「理念」①の自由連合を、志向としてあらわすものだということから、へ自由連合の事実とはじまるのである。

⑤ 右の論法でいけば隣人との連鎖関係もまた、デモの中で自然にあらわれる。それはだから何ら特別の状態ではない。意識の有無にかかわらず自由連合の状況である。

だが、その無作為の現象、あるいは状況としての隣人との連鎖関係が、静止状態からゆれうごくとき、きわめて重要な認識―自覚の問題が出てくると云わねばならない。

それは、「その関係の強化、あるいは切断は、個人の主体的判断によって、まったく自由、任意なものとして認められねばならない」ということである。

関係の態様の変化

たとえばデモが機動隊と衝突するおそれが深刻化したとき、「この場で自分はどうするか」という判断が最終的には必ず個人々々に出てくる。

デモ隊からの個人的離脱―関係の切断。あるいはその現場への積極的滞留―隣人への呼びかけにあらわれる関係の強化、というそのときの去就についての行動は、誰にも強制されない本人自身の判断にもとづく、自由、任意なものでなければならぬ。最低、デモの中の誰からもその去就について、非難や攻撃をうけない。しない。それがデモの中で保証されているということである。

では、10.26デモにおいて、そのことが保証されている

たか―というと、個人の去就を自由とする前段階的状況は一応存在しながら、その最終における問題は、あきらかでないまま、全く自覚されていないことの向題としてあるといえる。

へところで、もしこのことをはっきりさせようとする時、それは是非が云われる前に、「あの10.26デモでの市民グループの一部は、突進前に滞留しつづけることで、むしろ機動隊を挑発するというハネ上りの行為が顕著にあったというべきではないか。そのような意味で少くとも指揮者の指示を守るといふ最後の線が今後はつきりと打出されるべきだ……」あるいは「では、デモのある部分が機動隊にはげしく制圧をうけているとき、逃げだすことは個人の自由で任意なのか。そんなことで一体どうして座るか―」という統一への回帰をあらわにした声がかからず出ることになるだろう。

それはデモの形態と性格、その有効性の問題として、改めて別の角度から論じられねばならないということにおいて、見当ちがいの質向である。いまここでそのことに立入る紙面はないが、

「自由連合は、もちろんへ非暴力直接行動」と不可分に結びつくものである。そして、ごく概念的にいえばへ非暴力直接行動は、相手の土俵へふみこんで相手のルールで座うのではなく、相手を自分の土

★市川定夫さんの金沢での講演録(人権擁護隊の恐怖)。もうよく判つてると思つる人でも改めて聞かす方があつた。必読。送美 仰月

僕へひきこんで、自分のルールで闘う、人民の闘争方法である。そのことでは、まずへ非暴力直接行動は、相手の暴力に対して、行使の余地を与えないことにおいて無力化してしまうものだ」とだけ云うことで、大体の推測をしてみらるのではないか。――さて、以上のようにへ理念の①②について1026デモをしらべてみると、それはすこぶるあいまいな部分のこしなから、ほとんど自由連合への追及、そのへ志向としてある、ということを追認することができらう。というよりか、そのようにへ認識することがどうか、自分のまず姿勢にへ自由連合の土台はあるといわねばならない。

☆ ☆ ☆

◎へあまり余白がないので手短かくかく。)

さいごのへ理念の③は、へ理念の①②の状況として遍在する自由連合を、さらに意識的なデモのへ力として、行爲の上で具体化するの心得である。

それゆえにデモのなかで、別して自覚的に自由連合を追及する人たちに、このへ非暴力直接行動の基本的姿勢をいってよいだろう。

たとえばシーブルックの占拠で、ファシリテーターとよばれる人たちが、それである。彼らは人々の連鎖関係の接点に身を置き、デモの指揮者ではない部分としての役割を推進することで、斗争の力をつくりだし

た。

もちろん、そのような人たちが多ければ多いほどよく、その網状的デモの展開は、総体の力としての示威を相乗的に大きく發揮することになる。

念のために云えば、1026のようにさまざまの人たち、労組や学生や、その他の市民のなかにも統一的志向をもった人たちがいるデモの場合、それぞれの異なった斗いごまをもそのままだに、デモの総体のなかにとり入れながら、そのすべてをくるめて非暴力直接行動へと、へその斗い方を交える役割こそが、この理念③にほかならない。

それゆえ、真に自由連合デモとは、このへ理念③によって、いっそう運動の意味をもち、非暴力直接行動を力として発現することで、へ統一を具體的にのりこえるものなのである。

へ斗い方を交える役割はまずその視点をかえることからはじまるだろう。たとえばイオウ421号でぼくは次のように1026関係者の問題を聞いた。

「そしてにしても、このデモ届出の責任者になつてるAさんはさぞ困つただろう。ポリの前で、わがごとく「ごんなアナーキーなやり方では、もうこれから責任はようどらん。次から市民グループを先頭にするのを考える」と云つた。……ぼくも「それをもつともや」といって、さ、早よ動いとみんなに云つ

てまわった。そのような弱腰、だら幹ぶりへの非難の眼を承知の上で。つまり、あのような高揚のなかで、ホリの鼻先をそらし、また時間をかせぐという、対警察向けとしてAさんの役割はきわめて戦術的に重要で微妙だったのである。

ぼくらのデモには本来、リーダーや責任者はいない。一人一人が責任者である。とすれば、あの場合、責任者ぶるのは、ただ警察に向けてたという意味において、

誤解をさけるためにつけ加えると、もちろん「一人一人が責任者である」ということでの強調は、「責任者」が「指揮者」が必要でないということではない。

あのときの判断で、隊列の中の誰が呼びかけてもよいし、指揮してもよい。Aさんが立場上指揮者として指示の声をあげることも当然だ。

ただ、そのようなAさんの指示を聞きとった上で、ひとりひとりの責任としての行動がある。ということである。つまりは、指揮者の指示の上に、自分の判断による指示を重ねて行動するという自由連合デモとして自明のことが、この文外の意味としてある。ここでぼくが云いたかったのは、そのような状況をどのように役割においてうけとめるか、という自由連合のへ視点である。

(付記)

さらに問題としてのこっていることの二をあげると――

① 突進前の状況は、「あのままもう何分が放置したら機動隊の本格的制圧をうけて、大混乱となったかもしれない。だから一刻も早く移動すべきものであった」というAさんの判断と、「女」こどもを交えた市民グループへの制圧は先方としても決断が要る。もうすこしがんばっていても大丈夫」という、二つの異った見解があった。それが同時に呼びかけや指示として出たときどうするか。いうまでもなく立去るか、まだがんばるかは、その場に居合わせた個人々々の任意な選択としてある。問題は、最終的にはみんなをへつまりデモをどうするかでなく、自分はどうするかである。つまり

② そのようなやり方が「できるようにしてやる」デモなのだということをまずはっきりしておくことがデモの出発点であり、終着点である。

③ とすると、労組があの場合で解散したり、追い越していったりしたことや、学生がちようちんを一切もたずググザグデモをしたことへの対応の問題もはっきりするだろう。

現場では、それらのすべてを肯定したところで――そのこに論議がされることはよい。されることがよ

やウリニース購読は、匿名記入・印刷切手貼付済の封筒を事務局へお送り下さい。紙代は任意のカネで済むので、おのれに。つて、その次のデモは変化し発展する「で」であるようにしてやる「デモ」は「自由連合デモ」へとすすむ方向がみえてくるのである。

⑧ すなわち「で」できるようにしてやる「デモ」とは、ほとんど理念の③の自覚を欠いていることにおいて、非暴力直接行動を自覚的にとらえるものではないことによつてよかれあしかれハプニングをおこす可能性をもつ。そこでそのハプニングをデモのへ弱さとし、克服のためには規律や指揮、服従というルール以外にないという見解が、すぐ統一への回帰として出てくる。だが、そのハプニングの可能性は、また創造力の可能性でもある。それが混乱のおそれをもつものでもあつても、それをデモのへ強さへと積極的に転化することこそが自由連合デモである。

理念③はそのことをデモの中につくりだす姿勢であり、追及にほかならない。 （未完的完了）

おさだめ

反原発10月行動を伝える 全8時間小集会

★出席希望の方ハガキまたは電話
を木田あつまで下さい。Tel 647-4081

日時を相談おしやします。

★ところ-多分-ウリ事務所

★食事及び終了後のお酒を
用意しております。

★時間 午前11時～夜10時

★参加費 100円（前納原則）

★定員 2人（早い者順×4）

おしやせなど

- ④12月3日（日）PM7 60分カランドキメンタリーフィルム
へ久米島の虐殺へ上映会・袖戸エカウタス（国鉄
六甲道駅下車5分。電話078-821-319）300円。
- ④12月10日（日）PM6 不払い連しごと塾（あなを君
の未知の才能が花開く）向合せ06-601-0089
- ④12月15日（金）へ丸山友岐子さんを囲んで「死刑」は
あなたと無縁か？（午後6時）梅田太田寺（電話は
311-5480）会場費300円。（東大教員）
- ④12月17日（日）PM6 不払い連（入国管理局）シマス大パ
ーティー（共同）尾つゆ草。恒例方があります。300円。
- ④12月27日（土）AM11 PM10 へ反原発全の時間集会（新
しい世界をつくるために。由比みゆの601-0089（あなを君）
ことでこれはナントウリ主催です）せびどうぞ。

★今その大論文？はまず水田ががき、向井と討論
しつつ、向井が補記したものを、さらに水田が補訂す
るという書き方をした。ガリ切りをやりながら進
めたので首尾の整理不十分なものになつてしまつた
が、ぜひウリの仲間にも、この討議に加わつてほし
い。その意味で、よんで、それから感想や批判を！
○10月までの輪読をうやむや、コワレてどうアケんのを
ナントウリ直して、毎日、花米をふらふおそいで使つて...

（考）